

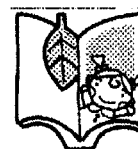
～メッセージ～  
みなみの風に乗せて



今回は、自閉症についてご紹介します。是非、お子さんとご一緒にお読みください。

参考図書

障害を知る本① 自閉症の子どもたち 太田昌孝＝監修・編 大月書店  
障害を知ろう！みんなちがって、みんないい  
2 自閉症の友だち 吉田昌雄・川北敏晴＝監修 金の星社



自閉症は 心の病気ではありません

自閉症と言う漢字の意味からして、「自分のからに閉じこもっている病気」と思う人もいるかもしれませんが。自閉症の子どもたちは、「外からのいろいろな情報をきちんと知るはたらきに障害がある」ために、まわりの状況を知り、それに対応することが、うまくできないでいるのです。

自閉症という名前は、1943年に研究報告をしたアメリカのレオ・カナーという精神科の医師がつけました。

お母さんの育て方に原因があるといわれた時代もありました。「お母さんの愛情がたりなかったから」「お母さんが甘やかしすぎたから」「テレビばかり見せていたから」など、とくに親の育て方が問題にされた時代でした。お母さんたちは自分のわるいところを反省し、自閉症をなおそうといっしょうけんめいになりました。でも、自閉症はなおりませんでした。原因は育て方ではなかったからです。

自閉症は 中枢神経の障害です

体と脳をむすぶ神経のなかで、いちばん中心になっているのが脳とせきずいの神経で、これを中枢神経といいます。自閉症の子は、この中枢神経に障害をもっているのです。

自閉症の子は、目や耳のはたらきにはなんの障害もありません。きこえているし、見えているのです。しかし、目や耳から入ってきたさまざまな情報を整理して、全体としてまとまった意味のあるものにする（認知する）ことがいけません。

見たものを脳に正しく送信しても、その情報を全体の中で整理してとらえなければ意味をもちません。たとえば、ある場面を見ても、その中の特定のものだけが強調されて、全体がよくわからないというようなことになります。

ことばもそうです。耳で音声をキャッチしても、特定のことばだけが強調されて、話の全体がつかめないのです。外国人に英語で話しかけられたとき、知っているいくつかの単語はわかっても、知っていることの全体がわからないのとおなじような状態なのです。

自閉症の 診断基準

自閉症は、育て方や環境に原因があるのではなく、生まれたときからのものですから、赤ちゃんのときからその傾向があらわれているはずですが、でも、それはほんのわずかなので、たいていの場合、お母さんでも気づきません。

おむつがぬれていても泣かなかつたり、おとなしくいつまでもひとりで遊んでいたりしても、「個人差」、「個性」とみまちはえるほどです。2歳くらいになっても指さしをしなかつたり、呼んでもふり向かなかつたりするので、専門の病院に行き、いろいろと検査した結果、自閉症とわかることが多いようです。

自閉症の診断では、次の3つが基準となります。

1 人との関係で、視線をあわせようとしない、表情がない、身ぶりでの表現がない。また、みんなと行動をともにして、感情を共有することがない。

2 ことばの発達がおくれている、人と会話のやりとりができない、話しことばがほとんどないか、あっても、おうむ返しかひとりごと、あるいは感情がなく一本調子だったり、おなじことばのくりかえしなど。 ※ 自閉症のなかでも、アスペルガー症候群というタイプの人たちはことばの発達におくれがないので、会話に不自由しません。ただし、人とのコミュニケーションがとりにくいという自閉症の特徴がみられることはあります。

3 活動や興味の範囲が極端にせまく、かぎられている。たとえば、つみきを一列に並べるだけだったり、おなじことばかりいつもくり返している。まわりのようすが少しでもちがうのを極端にきらう、など。

その他に、4、さまざまな過敏性の問題、5、運動や動作のぎこちなさ、不器用さが伴いやすいといわれています。

以上の特徴は、3～6歳ごろにもっともはっきりしてきて、年齢とともに改善していきます。しかし、多くの場合、大きくなってまわりの人の理解と支援が必要です。

## 友だちになるために



### ○ あいさつや話しかけをしよう

- 1 外からの情報を受けとるのががてです。簡単なことばで、やさしくはっきりつたわるようにしましょう。場合によっては身ぶりや、文字や絵、写真を使うのもよいことです。
- 2 「おはよう」「さようなら」のあいさつは答えがかえってこなくてもしてください。「これはなに？」とたずねると、「これはなに？」と同じことばがかえってくることもありますが、おこったり、わらったりしないように気をつけましょう。
- 3 「ねえ」と話しかけても通じないことがあります。名前を呼んでください。「いわなくてもわかるはず」は通用しません。「なにを」「いつ」「どうする」というように、できるだけ具体的に説明しましょう。

### ○ こんなときには教えてあげよう

- 4 集団行動ががてで、順番を待てなかったり、席につかなかったりすることがあります。いけないことだとわからずにしていることが多いので、「うしろにならぼうね」「席につこうね」とやさしく伝えてあげましょう。
- 5 あぶないことだとわからずに、危険な場所にはいりこんだり、高いところにのぼることがあります。大声をださず、落ち着いて注意し、それでもやめないときは、先生や近くのおとなをよびにいきましょう。

自閉症の子は、人をだましたり、うそをついたりしません。いたづらをして、悪気はないのです。

(裏へ続く)

- 6 ものを貸してほしいときなど、なんのこだわりもなく持っていってしまうことがあります。  
『貸してね』って、言おうね』と教えてあげましょう。

○ 変化させる前に知らせよう

- 7 急な変化はにがてです。予定の変更があるときは、まえもっていいいに知らせてあげましよう。物の置き場所を変えるときは、カレンダーに予定を書きこんだり、絵などを使ったりして、移動先などを知らせましよう。

○ おとなに応援をたのもう！

- 8 教室や家からいなくなり、どこにいったかわからなくなったとき

- 9 突然、大きな声で泣きだしたり、大声をあげだしたとき

- 10 自傷行為という、自分の頭をなぐりつづけたり、体にきずをつけたりするような行動がはじまったとき。あるいはまわりの人やものをきずつけるような行動がはじまったとき。



○ してはいけない！

- 11 こだわりのくせが強いので、へんだなと思うことがあっても、それをおもしろがったり、からかったりしないようにしましょう。

- 12 みんなでおなじ行動をとろうとするときに、友だちができないからといって、文句を言ったりしないようにしましょう。できないことは助けあうようにしましょう。

- 13 意味のわからない話をしたり、ふしぎな行動をとっているときでも、笑ったりしない。

**自閉症の子が困っていること**

※ 自閉症の人すべてにあてはまるものではありません。

◇ 相手の気持ち

大好きな友だちと遊んでいるのにうれしさや楽しさのあまり、一方的にちょっかいをかけてしまいます。相手がいやがるようになっていても、相手の気持ちの変化が読み取りにくいいため、しつこいと怒らせてしまうことがあります。

◇ 二つのこと

何かをしているとき、しようとしたときに、話しかけられると返事ができません。

靴をはこうとしているときに、あいさつされたとしても、靴をはくことに気持ちが向いているので返事のあいさつができません。

無視したとか、返事をしない、あいさつができない、といわれることは悲しいことです。

返事が聞こえるまで、あいさつされつづけると、とても困ります。

靴をはき終えたときに、あいさつしてもらえたら、笑顔であいさつできるのです。

どんな些細なことだとしても、一度に二つ以上のことを考えたり取り組んだりすることは、とても難しいことなのです。

◇ 聞こえ方

登下校時は、たくさんの音が耳にとびこんできます。

車の騒音、人の話し声、風の音、鳥の声、など一度にたくさんの刺激を感じています。  
コンディションの状態にもよりますが、学校に着いた時には疲れてしまっていることもあります。

◇ 放送・音楽

デパートの店内放送がきらいです。学校のチャイムや校内放送もいやです。好きな音ときらいな音があります。聞きたくないときは、耳をふさぎます。

◇ 話がわからない

体育館での朝会や式での話がわかりません。一生懸命聞いていても、何か言っているのはわかるけど、何の話かわかりません。わかろうとするので、とても疲れます。

◇ 味

食事の時、味がまざるといやなので、おかずは一皿ずつ食べます。最後に白飯をデザートに残します。給食も三角食べをするようにといわれると、しんどいのです。

◇ 蛍光灯が痛い

疲れていると蛍光灯を消してという子がいます。白熱灯に変えると落ち着きます。  
蛍光灯の光が目にはささるように痛いと感じることがあります。

◇ 誤解

大きくなったね=肥満だね と解釈して、家での食事を減らそうとすることがあります。

## これからの社会へむけて



自閉症という障害について、わたしたちはどの程度理解しているのでしょうか。ふだんの生活のなかでは、自閉症の友だちと接する機会が少ないため、まちがった理解や自分勝手な思いこみをしているかもしれません。自閉症の友だちも、わたしたちとおなじように、学校や地域のなかで、考え、感じ、楽しいときもあれば悲しいときもあるといった、日常生活をおくっているのです。

「ノーマライゼーション」ということばがあります。これは、障害のある人もない人も、わけへだてなく、おなじように生活するということです。障害のあるひとやお年寄りのなかには、学校や職場、地域社会などから差別されたり、隔離されて生活していたりする人がいます。そのような人たちが、わたしたちとおなじように生活できるような社会を実現する必要があります。障害のある人たちやお年寄りが安心してくらす社会は、すべての人たちが安心して、平和にくらす社会です。

今後、高齢化社会がさらに進展するにつれて、病気や障害のある人たちがふえていくことでしょう。わたしたちは、自立した社会の一員として、どんな人ともなかよくして、ともに生きるという発想のもとに、社会をつくりあげていかなければなりません。そのためには、障害のあるなしにかかわらず、わたしたち全員が協力しあい、おたがいにささえあっていく必要があるのです。